慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史學科春期旅行記
Sub Title	
Author	西原, 俊二(Nishihara, Shunji) 保坂, 三郎(Hosaka, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.155(333)- 157(335)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

史學科春期旅行記

昭和九年五月廿七日（日）快晴に惠まれて石橋山、箱根方面へ恒例の春期見學旅行を行つた。伊木先生指導の下に、一行は教授先輩九名、學生八名、都合十七名。東京驛午前八時十五分發の熱海行にて同九時卅六分小田原驛着。直に富士屋自動車の大型バスに搭乘し、風光明媚なる片浦の景を賞しつゝ、十五分にして石橋山着。此處は箱根の支脈東に走つて海に盡くる切所で、大軍を動かし得る所ではない。されば僅か三百余騎を以て三千餘の大敵に當るには屈竟の地勢であつたであらうが、救援すべき味方の軍勢到らざるに先立ち、腹背に強敵を受けて一敗地に塗れざるを得なかつた。併し風雨を衝いての夜戰であつたことは、敗將頼朝にとつては却て幸であつたかも知れぬ。今實地に就いて、吾妻鏡などに見えたる當時の戰況を考ふるに、敵將大庭景親が三千餘騎を隔てゝ軍したるは北方の石垣山なるべく、三百餘騎を以て後山に陣し、背後を脅したる伊東祐親の陣地は南方米神山であつたことが、實地踏査の結果判斷せられる。さて一行はこの戰に頼朝のために最初の犧牲となつた若武者、佐奈田與一義忠が俣野五郎景久と引組んだねぢり畑や、佐奈田手付石などを見つゝ、右に石階を上つて、義忠を祀つた佐奈田神社に詣で、更に南、谷を隔てたる小丘に佐奈田の郎黨文三家安の墓を弔して、再びバスにて小田原に返り、舊小田原城の大手口にある鐘樓に時の鐘を仰ぎ、濠に沿つて縣社二宮神社に詣る。次いで板橋町を右折して山縣公の別莊古稀庵を訪ねる。今の建築は大正十二年の大震災後、復舊したものであるが、前面には相模灘遠く闊けて、夜は漁火の點々たるを望むべく、近くは一夜城で名高い石垣山、更にその右には箱根の二子山が屹立してゐるのを仰ぐことができる。庭の芝生に頼朝の駒止石と云ふが存してゐる。廣い庭苑を一巡するに、木立あり溪流あり、丘あり、谷あり、小規模ながら變化の妙に富み、その趣味多き、さすがに含雪公の別莊と頷かれた。現庵主熊本利平氏及び來泊中の本多次郎氏の厚意は、洵に感謝の外はなかつた。法學部の板倉卓造教授は國府津より行を共にせられたが、此處にてお別れした。次いで山崎の古戰場を貫く新しい自動車道を一直線にドライヴし、箱根國立公園の標柱を右に見て、三枚橋を渡り、湯本早雲寺に到る。住職に案内せられ、寺寶を拜見する。矚目の一部を列記すれば

本堂襖、虎の圖（傳古法眼元信筆）屏風一双（傳狩野山樂筆）
國寶文臺、硯箱（北條氏政使用）九條袈裟（後奈良天皇より開山大隆禪師へ恩賜のもので、蜀江錦である）北條家古文書一卷、人魚匙（正親町天皇恩賜）種玉庵宗祇の文庫　北條氏綱畫像　北條氏康畫像　後奈良天皇徽號勅書（開山宗清に正宗大隆禪師の號を賜つたもので御畫日がある）後奈良天皇勅願所綸旨　開山大隆禪師頂相　開山大隆禪師遺誡　寧一山書　松花堂書狀等

で名高い國寶北條早雲畫像は目下東京帝室博物館に貸出中で見ることが出來なかつた。庭は香爐峯と稱し、北條幻庵の作、小堀遠州の修補と傳へらる。正面の椎樹に巨大な蜜蜂の巣があると住職の話であるが、時折微風にのつて、その唸り聲の聞えて來るのも初夏の感じである。境内鏡樓の鐘は眞覺寺元德二年六月五日の鑄造にかゝり、天正十八年小田原の役に秀吉之を陣鐘としたものである。本堂横の綠蔭深き所に北條氏五代の墓（寛文十二年北條氏治建立）、連歌師宗祇墓、幕府の典醫今大路道三墓、紀伊國屋文左衞門番頭の墓等に奠し、二時四十分同寺を辭去した。これより湯本、塔之澤、宮ノ下等の溫泉場を經て、鷹巣山、二子山などを窓外に眺め、賽之河原の石地藏や多田滿仲、曾我兄弟、虎御前の墓と傳ふる石塔を左右に見て、蘆ノ湖畔元箱根に下車。箱根權現に參詣する。高い石段の兩側には鬱々たる老杉が茂り、社殿の背後は新綠目覺むるばかりである。寶物館にて陳列の國寶萬卷上人木像を始め、北條時宗尺牘、豐臣秀吉自筆消息、足利將軍、細川高國、織田信長及び後北條氏文書その他幾多の太刀、木像、古文書、繪卷等を巡覽し、また社務所に於て特に國寶赤木柄短刀（傳曾我五郎使用）、大石内藏助金錢請拂帳等を見る。かくて記念の繪葉書を貰つて神社を辭し、湖畔に古代湯釜（一は弘安六年五月、他は文永五年十一月鑄造）を見、所謂畫なほ暗き杉の並木を過ぎて、箱根關所址に達し、見返り松に古を偲びつゝ、四時半箱根町の考古館に到る。關所に關する諸記錄、手形、各藩の印鑑、關所札、宿帳など數多の遺品を興味多く觀覽した。殊に一行の愉快を感じたことは我が史學科最初の旅行の際、故鎌田塾長より當所石内本陣に宛てた謝狀（大正元年十月廿三日付）が立派に保存されてゐることであつた。

かくて五時半同館を出でて、解散することゝし、一部は即刻歸京の途に即き、殘る過半は別路先着せられてゐた占部教授と共に蘆ノ湯松坂屋に一泊した。（西原俊二記）

第二日

五月二十八日（月）昨夜蘆の湯に宿つたものゝ一部はこの日三島神社に向ふことゝなつたが、その一行は間崎・今宮兩先生、坂本・三橋・德永・保坂の六人であつた。兩教授と共に先發せる三橋、保坂の徒步組は間もなく御殿場へ赴く一行及び坂本、德永兩君を乘せて疾驅せるバスに埃をあびせかけられた。名所に多い多田滿仲の墓・曾我兄弟・虎御前の供養塔、さては弘法大師一夜作りの石地藏などが昨日と同じく自動車道の左右にもつともらしげに並んでゐる。殘鶯の聲、嫩草の綠、孰れも都會生活者の眼を喜ばせること限りなく、間道を笹の葉わけて行くのもうれしい。程なく舊道に合して湖畔に出る。折しも藍碧の湖上、薄曇りの空に、淡く富士の美容に接し、忽ち各自キャメラをむけてものにしやうと試みる。前日の並木道をそのまゝ步いて湖畔の箱根ホテルで先着の兩君と落合ふ。畫食や記念撮影をすまして後、バッカードの爆音勇ましく三島へ向ふ。薄日に淡い山々、谷々、綠樹、紅躑躅、或は前に、或は後に富士の優姿。眼にうつるものすべて麗はしく、頰を過ぐる風亦快い。ドライヴ約一時間の後三島神社の大鳥居前に爆音は止む。

先づ參拜。寶物館内に於て各自自由に見學する。私自身は許を

得て國分二寺の古瓦の拓本をとる。古文書類には頼朝、尊氏を始め立派なもの多きが中に、特に

此心經一卷爲病腦祈願染愚筆謹拜書

奉納三島神社者也

建仁二季八月十日　　從二位源朝臣頼家

の奥書ある源頼家筆般若心經、又

寄　進　　三　島　社

伊豆國安久郷事

右爲天下泰平所願成就奉寄進之狀如件

延久三年正月七日

權中納言兼陸奥大介鎮守大將軍源朝臣（花押）

とある北畠顯家寄進狀の如きは際立つてゐた。その外國寶蒔繪櫛笥・刀劔等を見て館を辭した。親切なる禰宜の東道により、一昨年新たに下田街道の市ケ原筋違橋下より發見された國分尼寺塔心礎といはれるものを祐泉寺境内にみる。この礎石は勿論移動してゐるので、尼寺のものであるといふ確證はないのであるが、所謂舍利奉安孔を有する立派なものである。伊豆の法華寺については、三代實錄、元慶八年四月廿一日の條に、

伊豆國司言。國分法華寺承和三年失火燒亡。其後以二定額寺一爲二法華寺一。諸將二新建一。其料可レ用下修理國分幷通二三寶一布施祈上。聽レ之、

とあるのが唯一の文獻であらうが、これによつてみてもその衰頽は割合に早かつたものらしい。實際のところこれを考證するに足る文獻は他に見出されない。

次いで國分寺址を訪れる。日蓮宗蓮行寺内に塔址とみるべき土壇の中に數箇の礎石を殘すのみで、昔日の面影を傳ふべくもない。

延喜式卷二十一玄蕃寮の條に、

凡和泉國安樂寺。伊豆國山興寺。加賀國勝興寺。能登國大興寺。並各爲二國分寺一。置二僧十口一。（下略）

とあり、同卷二十六主税上をみると、

伊豆國正税。公廨各六萬五千束。三島神祈二千束。國分寺祈一萬束。大安寺祈三千束。禪院祈一千束。國分二寺供養祈一萬束。三神寺祈二千束。文殊會祈一千束。（下略）

とある。前者に於て山興寺がこの蓮行寺であるか、又後者に現はれてゐる大安寺、禪院三神寺、又前述せる定額寺等とは、どんな關係があるか等、未解決のものである。現在三島神社藏の弘長元年六月六日の文書の中に、

三島宮經所國分寺供僧等申安居上分麥事

といふ樣なことがみえるが、この問に如何なる變遷を考へるべきか、仲々容易に解し得られぬことであらう。遺瓦の樣式から考へてみると中央のものに比して、その形が崩れては居るものゝ、鐙瓦は所謂山田寺式の單辨のものであるし、宇瓦も三重孤紋のものである。勿論一直線的な樣式論は成り立たぬとしても、この種の瓦は一般に白鳳期のものとされてゐるのであつて、天平十三年頃のものより一時代古い樣式をもつてゐる。このためにこの二寺に關しての問題は一層複雜となるであらう。

發車時刻も迫つてゐたので、再來を期して三島驛へ自動車を馳せ辛じて汽車をキャッチし、その夜歸京することが出來た。

終にのぞみ我等は各所に於ける御厚意を深く感謝するものである。（保坂三郎記）